

【書評】

『The Haunted Wood』

アレン・ウィンスタイン & アレキサンダー・ヴァシリエフ著
ランダムハウス 1998年11月

評者 中山俊宏
アメリカ研究センター研究員

いま米国で米国共産党が話題になっている。なぜいまさら米共産党に関心が集まっているのか。米国では永らく米共産党を反共ヒステリアが生みだした「亡霊」とみなす傾向が強かった。ジョージ・ケナンはその回想録の中で、米政府への共産党勢力の浸透は想像の産物ではなかったと明記しているが、当時それを裏づける証拠は乏しく、マッカーシズム以降、反共主義は移民社会である米国の影の側面である排外主義と、反知性主義の象徴として負のイメージを付与されていた。ソ連のスパイとして処刑されたローゼンバーグ夫妻やスパイ疑惑のために公的命を絶たれた国務省高官アルジャー・ヒスの件に対する米国知識人の反発に典型的に見られたように、米ソ対決という国際的状況にもかかわらず、米国内における反共主義の基盤は、確固たるものとは言えなかった。

しかし、冷戦終焉後、当時の状況は根本的な再検討を迫られることとなる。米国と旧ソ連における未公開文書の公開を受けて、米国共産党の諜報活動への積極的関与を決定的に裏づける証拠が歴史家の手によって次々と発掘され、新たな米国共産党研究が多数発表された。その決定版とも言えるのが、ヒス研究で有名なウィンスタインと元 KGB のヴァシリエフによって執筆された本書である。本書は、KGB と国家安全保障局(NSA)の文書をもとに、ヒスやローゼンバーグをはじめとする政府及びその周辺で勤務していたコミュニストとそのシンパによるソ連諜報活動への関与を克明に論証している。

本書中、ローゼンバーグの暗号名が「リベラル」であったことが示されているが、ローゼンバーグ事件が戦後の米国における進歩的勢力を結集させ、連邦政府への不信感を知識人の間に強く根づかせることとなったことを思えば、なんとも皮肉な状況である。こうした傾向に触発され、マッカーシー上院議員の再評価さえ出現しているが、なにごとも行き過ぎは危険であることは改めて強調するまでもない。